

東京藝術大学特別講義（DOOR）第7回目

演題	愛される建築を目指して
講師	大西麻貴氏 大西麻貴（おおにし まき） 1983 年生まれ 2006 年 京都大学工学部建築学科卒業 2008 年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了 2008 年～大西麻貴+百田有希/o+h を共同主宰 2016 年～京都大学非常勤講師 2022 年～横浜国立大学大学院 Y-GSA 教授。 百田有希氏 1982 年生まれ 2006 年 京都大学工学部建築学科卒業 2008 年 同大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了 2008 年～大西麻貴+百田有希/o+h を共同主宰 2009 年～14 年 伊東豊雄建築設計事務所勤務 2017 年～横浜国立大学非常勤講師 主な作品にシェルターインクルーシブプレイスコバル（2022 年）、Good Job! Center KASHIBA（2016 年）、二重螺旋の家（2011 年）ほか。 主な受賞に 2023 年日本建築学会賞作品賞、BCS 賞、2019 年日本建築学会作品選奨・新人賞、2018 年度 JIA 新人賞ほか。

◆◆受講生の感想◆◆

2年 ①

今回の講義で一番心に残った言葉は「一つのことにいろいろ(多重)な意味を重ねる」ということです。建築をするうえで、障がいの有無に関わらず、様々な人が楽しめるよう、一つのことに多重の意味を重ねることが大切だと聞きました。建築をする際に、光を多く取り入れる工夫や、一人でいれる空間、みんなと過ごせる空間、遊びを誘発する空間など、自分が想像しているより、様々な想いが 1 つの建物に込められていることを知りました。

看護をするうえでも、一つの援助にどんな意味をこめて実施するのか、対象の発言、行動にはどんな意味が込められているのか、考えてアセスメントすることと、少し似ていると思いました。空間から受ける影響もたくさんあると思うので、日常や看護をする際にも、色、光、広さなどの工夫を取り入れていきたいと思います。

2年 ②

私は建築に興味があるため、建築の話を聞くことができて面白かったです。目指す建築像(愛される建築)が言葉としてしっかり表現されていて、深い意味までは読みとることができませんでしたが、すごく素敵だと感じました。インクルーシブな建築と町とは、場をつくっていく営みのすべてが一体となって実現できるものであるということが心に残りました。

それはつまり、場をつくっていく営みのすべてが建築であり町である。

建築とだけ聞くと、建物の建設や構造のデザインなどを思い浮かべますが、その限られた所だけでなく、建築に関わる営み全体が含まれることが新しい考えで面白かったです。

2年 ③

在宅看護においては、部屋と部屋の距離、段差の問題など、対象の行動に対する障害が多いと思う。近年はバリアフリー化が進み、スロープの設置やステップバス、車椅子のまま乗れる車などもある。しかし、住宅の問題は簡単に解決するものではないし、改修にも多くのお金が必要になる。自分は「愛される建築」を「例え動くことが困難になっても、生活し続けられる建物」と考えた。対象が今の状態でも生活しやすいようにするには、訪問看護師が観察とアセスメントから問題を見出し、それに対して活用できるサービスを紹介する必要があると考える。

今回は訪問看護の実習に行くため、対象の状態のアセスメントだけではなく、住宅のアセスメントも行って、問題点を見出せるように観察していきたいと考えた。

1年 ①

私はこの講義を受けて、建築の素晴らしさを知ることができました。今まで建築のイメージは「綺麗な建物」「や」「住みやすい家(家族にとって)」というイメージでしたが、愛される建築とは、全ての人にとってより創造的なものになる、生命体であることを学び、印象が真逆に変わりました。

Good job! Center では1階が地域と繋がることのできるカフェになっており、2階には倉庫があり、みんなでいることのできる場所もありつつ、1人での場所も存在し、バラバラだけど一体感があり、とても素敵な建物だと思いました。また、コンバーサルデザインにより、「誰が便利」ではなく、様々な価値観により、誰もが便利に思う空間を作ることの素晴らしさを学ぶことができました。

1年 ②

専門家が専門分野に閉じこもって作り上げるものはひとりよがりになってしまいが、地域の人々など実際に使う人、触れる人と交流しながら作り上げることで、人々の中・地域の中に根を張ることができるのだと感じた。

看護においても、専門分野からひとりよがり提案・ケアを行っても効果は得にくく、ヘルスプロモーションを大切にされた方が効果が得やすい、通じるものを感じた。「バリアフリーは中心に誰がいるのか分からなくなりがち」というお話が、これまで聞いたことがない視点で興味深かった。ただ、輪を広げるのではなく個性を重ね合わせることで中心が生まれ、新たな価値が創造できるという言葉が心に残った。経験を重ね合わせながら、気づき、応用する力をつけたいと思った。

1年 ③

「ちがいをみとめ、ちがいを大切にする」「その人の能力を最大限発揮できる場をつくる」という考えは、看護と共通するものがあると思った。誰でも入っていけるオフィスは管理空間にならないように、という考えの元、設計されていて、病院のナースステーションは、個人情報や医療機器等の関係でむずかしいと思うが、病

室以外で患者さんとスタッフが関わることのできる空間があればいいなと思った。

「重ねられてきた時間を否定しない」という言葉が印象深かった。空間の寛容さという考え方に、私ができることはないか考えてみたいと思う。